パネル企画要旨

パネル企画1
「環境音楽」再考

司会・パネリスト　大嶌徹　（東日本支部）
パネリスト　中川克志　（非会員）
パネリスト　鳥越けい子（東日本支部）
パネリスト　広瀬正浩　（非会員）

近年、日本の「環境音楽」が世界的な注目を浴びている。米国のレコードレーベル Light in the Attic が発売した『Kankyō Ongaku: Japanese Ambient, Environmental & New Age Music 1980–1990』が2020年グラミー賞で「最優秀歴史的アルバム賞」にノミネートされた。同アルバムにも収録された吉村弘や芦川聡らの録音作品は中古市場で高額で取引され、アナログレコードやカセットテープのフォーマットで繰り返し再発売されている。本発表では、この Kankyō Ongaku のリバイバル現象から遡及し、1980年代日本で生じた「環境音楽」を再検討する。

上記のように、昨今の再評価はレコードコレクターらが牽引する録音作品への関心を中心としている。そのために、1980年代の環境音楽が狭義の「音楽作品」の創作から越え出る企図を含む動向であったことが看過されている。本発表では、環境音楽をめぐる「音楽作品」の域を超えた実践を拾い出し、当時の思想的潮流との関連性を明らかにする。その上で、その超領域的な試みが現在に何を問いかけているのかを議論したい。

まず大嶌がリバイバル現象を概観し、ここで後景に置かれた文化的諸相について問題提起する。中川は、吉村弘のサウンドアート作品を中心に取り上げ、1980年代環境音楽が、視覚美術やサウンドスケープの思想などが渾然一体となって形成されていたことを論じる。鳥越は、環境音楽をめぐって展開された通念的な「芸術」の枠組みからは外れた環境との交流、その根底にある「人間以上（more-than-human）」の概念にも繋がる音楽観との関連について論じる。広瀬は、吉村弘らの流れとは別に環境音楽に関わった細野晴臣に焦点をあて、同時代の思潮と細野との接続について検証する。以上から1980年代「環境音楽」を再考する。

パネル企画2

「前期」テンポ・ルバート再考
――楽譜・文献史料と初期録音資料のはざまで――

司会・パネリスト　鷲野彰子（西日本支部）
パネリスト　上田泰史（西日本支部）
パネリスト　ヘルマン・ゴチェフスキ（東日本支部、ビデオ動画参加）
パネリスト　橋本崚平（東日本支部）
ディスカッサント　神保夏子（東日本支部）

「盗まれた」テンポを意味するテンポ・ルバートは、演奏表現に不可欠な手法の一つである。一般的に、前期のテンポ・ルバート（18～19世紀）は、旋律のみが自由に動き、伴奏は一定であるとされ、後期のテンポ・ルバート（20世紀）は、伴奏も含めて柔軟なテンポ変化が行われるとされる（Hudson 1994）。

ここでは初期のタイプに焦点を絞り、テンポ・ルバートに関する歴史的言説と歴史的録音をどのように関連付け理解しうるのか、その方法論を検討する。演奏実践例は主に20世紀前半の録音資料とピアノロールを用いる。左右の手の微妙なタイミングのずれなどを詳細に分析する上でピアノロールは非常に有用だが、その信頼性についてはしばしば疑念が抱かれる。それゆえ、タイミングの観点から資料批判を行った上で、個々の分析手法と結果を示す。

まず、同じ演奏を記録したピアノロールの同一性について資料批判的見地から検証したのち（ゴチェフスキ）、左右の手の非同期について3つの観点から演奏データの分析結果を提示する。①ショパン《ノクターン》Op. 9-2（冒頭4小節）の演奏の歴史的変容（1913～1965）（橋本）、②ショパン《ノクターン》Op. 15-2の演奏比較（20世紀初期）と作曲家の修辞戦略の関連（上田）、③フリッツ・フォン・ボーゼ（18651945）によるモーツァルト《アダージョ》KV 540の演奏から再考する記譜と拍節の関連（鷲野）。後半は、これらの発表を踏まえてディスカッサント（神保）を加えてフロアを交えた議論を行う。演奏解析結果、各種文献に見られる定義や証言、記譜されたテンポ・ルバートの存在などを手掛かりに演奏データと言説史料を突き合わせることで、R. ハドソンが提唱する前期のテンポ・ルバートの定義を再検討し、モーツァルトやショパン作品の演奏実践に即した理解を深めつつ、今後の研究の方法論についても参加者と議論したい。